

長崎県美術館におけるイブニングライブの実践

加納暁子（芸術表現講座）

I はじめに

2005年4月に開館した長崎県美術館では、毎月日曜日、イブニングライブが行われている。第2日曜日は活水女子大学、第4日曜日は長崎大学教育学部音楽科が担当し、夕刻、美術館のエントランスロビーにて、音楽の流れる美術空間をテーマにコンサートを継続している。本論では、2年間のイブニングライブの実施概要をまとめ、コンサートの際実施したアンケート結果を分析し、イブニングライブの成果と今後の方向性について明らかにすることを目的とする。

II イブニングライブのプログラム

イブニングライブは1回の公演が30分間であり、2回公演が行われる⁽¹⁾。出演は教員及び学生である。以下にプログラムの例を示す。

1. 企画展と関連させたもの

『アイ・ゴット・リズム～アメリカ音楽特集～』

オープニング

「火祭りの踊り」（ファリャ作曲）

アメリカの音楽特集

ウエスト・サイド・ストーリーから（レナード・バーンスタイン作曲）

「サムホエア」「サムシング・カミング」「ワン・ハンド、ワン・ハート」「アメリカ」

ジョージ・ガーシュインの作品から

「魅惑のリズム」「スワニー」「サマータイム」「そんなことどうだっていいさ」

上記のプログラムは2005年7月24日に実施されたイブニングライブの内容である。この時期は企画展「アメリカ～ホイットニー美術館コレクションに見るアメリカの素顔」が開催されており、アメリカを代表する作曲家、バーンスタインとガーシュインの曲をピアノやヴァイオリンの独奏により演奏した。

2. 季節感を取り入れたもの

『冬の旅から春を想う～リクエスト特集第一弾～』

ヴォカリーズ（ラフマニノフ作曲）
シューベルトの歌曲『冬の旅』より
「おやすみ」「あふれる涙」「菩提樹」「辻音楽師」
シューマンの歌曲『詩人の恋』より
「美しい五月」「おまえの瞳を見つめるとき」
「早春賦」（吉丸一昌作詞、中田章作曲）

上記のプログラムは 2006 年 1 月 29 日に実施されたイブニングライブの内容である。季節は冬であり、冬から春へ移り行く季節感をバリトンの独唱により表現した。また、イブニングライブを始めて以来、継続して行ってきたアンケートの中から、リクエストされたラフマニノフの曲をプログラムに取り入れた。

3. その他

『音楽に描かれた情景』

ノクターン作品 9-2（ショパン作曲～ボサノバ風）
夢（トスティ作曲）
雨だれの前奏曲（ショパン作曲）
月の光（ドビュッシー作曲）
シェルブールの雨傘（ミシェル・ルグラン作曲）
HANA・BI（久石譲作曲）

上記のプログラムは 2005 年 6 月 12 日に実施されたイブニングライブの内容である。当該期間は企画展が開催されていなかったため、ガラス張りの壁から運河が見られる美術館のロケーションを活かしながら、様々な情景が表現されている曲を選んだ。外の景色を眺めながら、音楽によって自由に情景を思い浮かべられる想像の世界へいざなうことを目的とした。「雨だれの前奏曲」などは、梅雨時の季節感を取り入れたものとも関連する。

『音楽と朗読のコラボレーション』

朗読と音楽

寺山修司作「1センチジャーニー」

朗読と演奏

亜麻色の髪の乙女（ドビュッシー作曲）

エレジー（フォーレ作曲）

ピアノトリオ第 1 番より第 1 楽章（メンデルスゾーン作曲）

（朗読 長田弘「黙されたことば」より）

上記のプログラムは 2005 年 10 月 23 日に実施されたイブニングライブの内容で

ある。本プログラムではナレーションを入れ、「朗読と音楽」では物語を読みながら、合間に物語の内容に相応しい曲を演奏した。また「朗読と演奏」では、作曲家を表現した詩を朗読した後、その作曲家の曲を演奏する構成を取った。詩と音楽との相乗効果が得られたライブとなった。

以上、イブニングライブで主に組まれるプログラムの内容として、1. 企画展と関連させたもの、2. 季節感を取り入れたもの、3. その他の三種類の傾向に大別することができる⁽²⁾。3. その他の部分では、音楽と情景、音楽と朗読というように、美術館という空間の中で今までにない新たな試みが挑戦できる場もある。また、毎回一つのテーマを設定するように心がけている。このテーマにより観客が音楽を鑑賞するうえで、一つの指針ができ分かりやすいと好評を得ている。曲目はクラシックの中でも、比較的よく知られたもの、分かりやすいものを中心に解説を加えながら、コンサートを進めるとともに、ポピュラー音楽や映画音楽なども取り入れている。

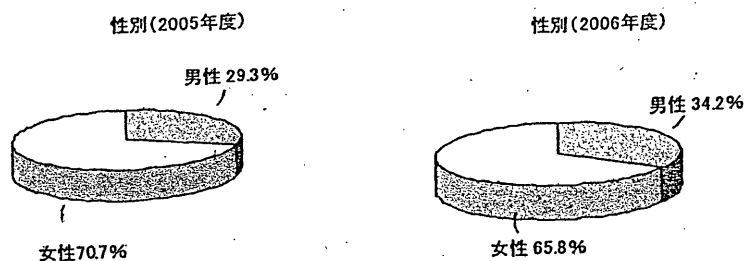
Ⅲ アンケート結果の分析

イブニングライブ実施後、観客に対してアンケートを行った。2005年度には5月、6月、8月、2006年1月、2月に大学が中心となってい⁽³⁾、2006年度には美術館が継続的に行っている。以下は、2005年度及び2006年度に行ったアンケートを概観、比較しつつ、イブニングライブの成果と今後の方向性についてまとめる。

1. 2005年度と2006年度の比較

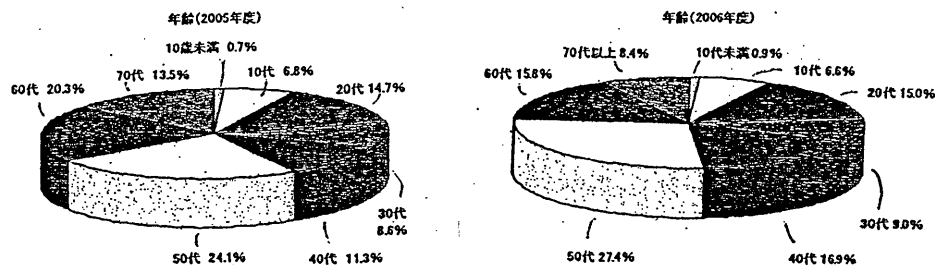
2005年度及び2006年度のアンケートで共通している質問事項について比較、検討する。

① 性別



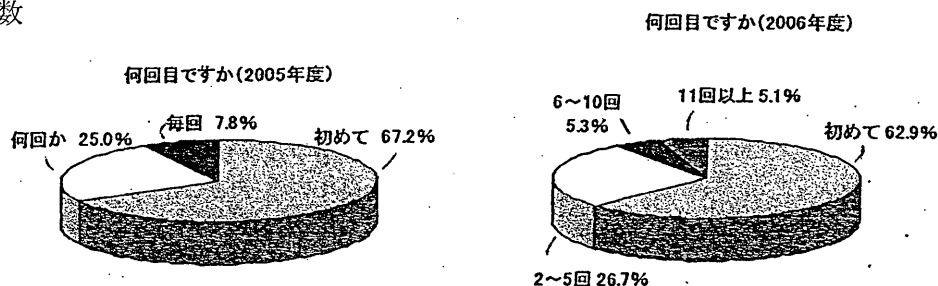
イブニングライブの観客を性別で見ると、女性が7割と多数を占めているが、アンケートに回答された方に女性が多かったともいえる。ただし、2006年度の方が男性が少し増えているため、選曲や気軽にコンサートに立ち寄りやすい雰囲気作りを考える必要がある。

②年齢



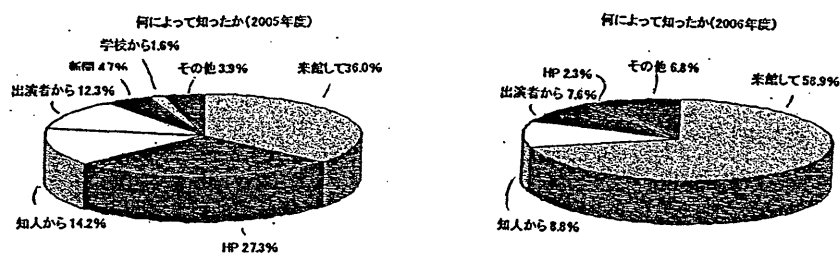
50代以上の方が、2005年度では57.9%、2006年度は51.6%と半数を占めている。美術館に出向くことのできる、ゆとりのある世代といえる。アンケートの内、30代の方が「ホールだと子どもと一緒に聴くことができないが、ロビーコンサートだと気軽に聴くことができる」といった意見があげられていた。子育て世代も気軽に楽しめるような企画が必要である。

③来聴回数



イブニングライブを聴いた回数を、2005年度は1月と2月のアンケートで、2006年度は4月から調査した。質問事項が共通していないが、初めて聴いた方は、2006年度はわずかに減ったものの、2年とも6割以上である。一方、毎回、及び6~10回、11回以上と何度も聴きにきてくださる方も少しずつ増える傾向にあり、イブニングライブは定着しつつあるといえる。また初めて聴く方が多いことは、観客が固定化していないといえ、これから周知される可能性をもっているといえる。

④何によって知ったか



2005年度はホームページや知人、出演者から知った方が多いが、2006年度は来館して知った人が増えている。1年目は知人や出演者を通じてイブニングライブを周知させる必要があったが、2年目以降は美術館への来場者も増え、コンサートに足を止めて聴く方が増えたのではないかと推測する。なお、その他には、テレビ、ラジオ、チラシなどが含まれる。

2. 感想から

以下は、アンケートの自由記述によって得られた感想をもとに、イブニングライブの成果についてまとめる。

①2005年度

- ・美術館でミニコンサートが聴けるなんて最高の喜びです。是非、続けてください。
- ・美術館の夕暮れの雰囲気合っていると思う。
- ・身近で生のクラシックが聴けてよかった。
- ・よく知られた曲で楽しかった。
- ・雑音が気になった。
- ・『早春賦』は一緒に歌えればよかった。
- ・コメントがあり、しゃべりかけて説明されたので、中に入りやすくリラックスして聴くことができた。
- ・小さなコンサートであるがゆえに市民一体感がほしい。
- ・楽器の特徴が聴いてみたい。
- ・生の演奏を聴くことが少ないので、このような活動はありがたく思っています。
- ・小さい子どもがいても気軽に聴かせて頂けて、ライブに行きたくても行けないので嬉しかったです。
- ・リクエスト特集など、いろいろ工夫されていて、ロビーコンサートの楽しさが倍増しました。

②2006年度

- ・日頃、あまり聴く機会がないので、週末に穏やかな気持ちになれました。親しみやすい曲がいくつかあったので、いいと思いました。(市民が多いので)
- ・短いけれど説明があったのが良かった。
『夏の思い出』は尾瀬の旅を思い出して楽しく聴きました。一緒に歌いたかったです。
- ・間近で生演奏が聴けてとても良かったです。曲も親しみの持てるものばかりでした。また、聴きに来ようと思います。
- ・映画音楽オンリーで生演奏が聴きたいです。夜景がぴったりですね。
- ・若い方の熱意が伝わってくるコンサートで幸せなひと時を過ごさせて頂きました。
- ・最近、コンサートに行く機会がなかったので癒されました。
- ・日が暮れて混雑もなく理想的でした。県展を見にきて、もう一ついいことがあったような気分です。
- ・子どもに聴かせられて良かった。
- ・会場と客席に距離がなくて良かった。
- ・前回見て良かった。無料で時間が短いので小さい子どもには良いから。

感想を概観すると、2005年度と2006年度に大きな違いは見られない。共通している事項は、曲目について、「親しみやすい曲があつて良かった」という意見である。親しみやすい曲とは、クラシックの中でも有名な曲、現代曲のような難解なものではなく、理解しやすく聴きやすい曲である。また、誰もが一度は歌ったことのある文部省唱歌やポピュラー音楽、映画音楽なども人気である。そして、コンサートの工夫として、曲や楽器の紹介は演奏をより楽しむための助けになるとともに、『早春賦』や『夏の思い出』などはプログラムに歌詞を掲載し一緒に歌うことによって、さらに演奏者と観客の一体感が生まれるものと思われる。

また、感想から観客はイブニングライブに何を求めているのかを考察すると、「癒し」や「幸福感」であるといえる。観客は専門的なクラシックコンサートを聴きに来館しているわけではなく、美術館に行くとき音楽が流れており立ち止まって聴いた人が多数である。そこで、絵画を鑑賞した後、美しい運河を背景にしたコンサートで音楽を鑑賞することによって、現実的な世界から離れ視覚と聴覚から芸術を楽しむ幸せな気持ちになる役割をイブニングライブは担っているといえる。

企画として、イブニングライブは基本的にステージを設けず、演奏者と客席との間は1mくらいの距離しか離れていない。そのことが、間近で演奏者の音を聴くことができ、演奏者と観客が一体となったコンサートの雰囲気を作ることができる。しかし、50代以上の方は比較的音楽に集中し、雑音や子どもが走り回る環境を気にされているが、30代の方からは子どもと一緒にコンサートが聴けて嬉しいという意見が得られている。両意見をどのように折り合いをつけていくかは今後の課題でもある。

IV まとめ

以上、アンケートをグラフにまとめ、自由記述式の感想を考察してきた。最後に、イブニングライブの成果と今後の方向性についてまとめる。まず、プログラムの内容について、企画展と関連させた親しみやすい曲や季節感を取り入れた曲によって、コンサートのテーマを定めている点は、概ね好評を得ているといえる。その中で、年齢層のデータは選曲をする際重要なデータとなる。50代以上が半数を占めている現状では、穏やかな曲、懐かしのメロディーが考えられるが、若年層の観客を増やしていくには、ポピュラー音楽や子ども向けの曲を取り入れたり、第一部は子ども対象、第二部は大人対象というようにプログラムの内容を変えることも考えられる。

また、初めてイブニングライブを聴いた方が6割を越す状況であるので、さらに魅力あるプログラム、演奏の質の向上、広報活動などに取り組み、何度も足を運んでいただけるコンサートを目指したいと思う。

親しみやすい曲を中心として市民の方に安らぎの場、気軽に音楽を鑑賞するこ

とができる場を提供している点は、イブニングライブの成果であるといえる。また、2006年度は特に「音楽文化運営論」の授業の一環として、大学3年生が一人一月ずつ担当し、プログラム案作りから演奏まで企画、運営を行った。大学生の演奏発表の場、企画、運営の実践的学習として寄与している点としても成果が得られた。今後は、音楽と美術とのコラボレーションをイブニングライブの場で更に探究し、生涯学習への発展を課題としたい。

註

- (1)2006年度は第1部が16:00～16:30(夏季) 15:00～15:30(冬季)、第2部が18:30～19:00(夏季) 17:30～18:00(冬季)の一日2回公演となっている。
- (2)例示したプログラムの他に、1.企画展と関連させたものとして、『パリのめぐり合い』(2006年10月22日実施、「AIGコレクション～フランス印象派からエコール・ド・パリ」開催時)、2.季節感を取り入れたものとして『秋の夕べにいろづくメロディー』(2006年9月24日実施)、3.その他として『夏休み、親子で楽しむ音のうみ』(2006年8月27日)などがある。
- (3)大学が行ったアンケートは、本学情報文化教育課程芸術文化コース4年の丸本弓恵さんが卒業研究のため実施した。